



「久慈市から医師を」

久慈病院（市国保山形診療所）
しげあき
馬場誠朗 外科医長

山形町出身・31歳。岩手医科大学大学院卒。平成17年、医師免許取得。久慈病院で研修後、岩手医大、県立釜石病院を経て、昨年から久慈病院と市国保山形診療所に勤務。

きれいごとではなく、わたしたちにとって患者さんが助かることは一番の喜びです。勤務中は満足に食事や睡眠もできないことがあります。より多くの人を救いたいと思い、合間をぬって学会や研究会にも足を運んでいます。周りの医師や看護師なども皆、同じ思いで努力しています。

ただ人員不足という厳しい状況は変えられません。外来患者さんを長い時間待たせてしまうこともあります。申し訳ないことに、精一杯やっても待たせてしまうのが今の久慈病院の現状なのです。

地域の医療を守り、患者さんを助けるためには、どうしても医師が必要です。地元を守るため、久慈市の中高生から医師が生まれることを期待し、強く願っています。



過酷な勤務（例・久慈病院当直）

7:30	出勤
7:30~9:30	会議・病棟回診
9:30~13:20	外来患者診療
13:20~13:30	昼食
13:30~20:00	手術・検査
20:00~1:30	救急外来診療
1:30~3:00	夕食・仮眠
3:00~4:00	救急外来診療
4:00~5:00	仮眠
5:00~8:00	救急外来診療
8:00~8:30	朝食
8:30~	通常勤務（※）

※当直明けでも休みはなし。通常勤務は20時過ぎまで手術。その後、研修医への指導や学会発表資料作成、手術後の回診をして帰宅。帰宅が日を越えることも少なくない

全国で問題となっている医師不足。わたしたちが住む久慈地域は、全国的にみても医師が少ない地域です。人員不足で手が回らず、外来は長時間待ちの久慈病院。医師の不足により診療科も縮小となっています。しかし久慈病院も開業医も、患者であるわたしたちの命と健康を守るため、昼夜を問わず奮闘しています。わたしたちが生きていくためになくてはならない医療。その実情から、医療を守るために必要なことを考えます。（5ページまで）

命の砦からの
SOS

医療の実情

医師不足の久慈

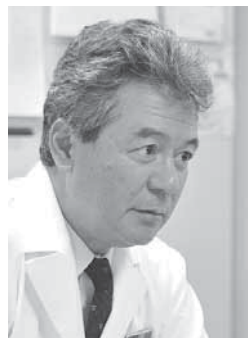
近年、全国で問題となっている医師不足。特に、久慈地域の状況は深刻です。

平成18年に厚生労働省が実施した調査によると人口10万人に対する医師数は全国平均217人で、岩手県は全国37番目の186人。久慈地域は118人で、県内で最も医師が少ない地域になっています。市は県や国に粘り強く働き掛けていますが、全国で厳しさを増す中、今以上に医師を確保するのは困難な状況です。

久慈病院も悲鳴

医師不足の波は、地域の核心を担う県立久慈病院にも押し寄せています。

平成15年度、42人いた医師は現在29人。（歯科医・研修医を除く）麻酔科、呼吸器科などは常勤医師が不在。同院は地域周産期母子医療センター（※）指定ですが、産婦人科は1人体制で、危険度が高い分娩は県立三戸病院に頼らざるを得なくなっています。一日当たり外来患者800人、入院患者230人を診る



「病院は危機的
一緒に考えて」

久慈病院
ただし
阿部正 院長



久慈病院のSOS

「治療できないのはつらい」



久慈病院・消化器科
い いちろう
赤坂威一郎 科長

皮肉な治療時間

命の砦。病气やケガで苦しむ患者さんと同じように、久慈病院も悲鳴を上げています。

信頼の表れでもある久慈病院の外来患者数。しかし皮肉なことに、外来患者が増えれば増えるほど、より危険な状態にある入院患者への治療時間は短くなってしまっています。久慈病院勤務10年目の赤坂威一郎消化器科長は語ります。「6人いた消化器科医も今は3人。人員不足ですが、皆信念を持ち医療の充実に努めています。重症患者さんを救う役割を担っている久慈病院と一緒に頑張ると約束した入院患者さんへの治療ができないのは本当につらいことです」。阿部正院長も強く訴えます。「長時間待ちの外来など申し訳ない状況ですが、スタッフは皆、身を粉にして頑張っています。病院の人員不足は危機的です。皆さんの健康と命のためにも、医療について一緒に考えてほしいのです」。危機的状況。今こそ患者側のわたしたちも医療の実情を知り、考えるときなのです。

わたしたちが
自分のために
できること—

1日当たり800人もの外来患者が訪れる久慈病院